

私はこう思う(5)

あそかビハーラ撤退

病院の否定ではない

熊谷誠慈・京都大学こころの未来研究センター准教授

による運営撤退は、単純に経費の問題だ。

ビハーラは、キリスト教のホスピスに対して、仏教が終末期医療に関わってこなかったという自己反省から始まった。素晴らしいコンセプトであるが、その実現が重要だ。

独立型緩和ケア病棟「あそかビハーラ病院」(京都市城陽市)の存在が否定されたわけではないと強調したい。浄土真宗本願寺派、村曹成が行われる一方、人材が学

び、活動する場所としても、あそかビハーラ病院は機能してきた。

仏教国であるフータンの大規模病院には、ビハーラ僧に相当する僧侶がいる。病を抱える人の心のよりどころとなり、心を満たす存在になっている。だから、緩和ケアで仏教が機能しないというわけではない。

本願寺派は、10年前にはあそかビハーラ病院を開設して良かったと考えていたはずだ。2022年までの経費支出が議決されていたにもかかわらず、21年度で支出を取りやめると法断した。賛否はあるだろうが、一度議決したことを覆す意味は果たしてあったのか、と思う。

が経費を払い続ける形態に課題があったといえる。リスクを分散する上で、出資者を個人や他の団体に広げる必要があったのかもしれない。また、病院の独立採算も積極的に推進すべきだっただろう。

これまでに本願寺派は20億円を投じてきたといいますが、得られた教訓を未来に伝えるべきだ。自の側面だけでなく、良かった点も含めて、前向きなシガシー(遺産)として残してほしい。

在宅での緩和ケアにおいても、得られた知見は生かされるはず。地域医療に関わる医療従事者の育成などにも生かすべきだ。そうすることで、日本仏教の社会機能を確立していくことになる。



熊谷誠慈(くまがい・せいじ) 1960年5月、広島県生まれ。京都大学こころの未来研究センター准教授。内閣府ムーンショット型研究開発制度プロジェクトリーダー。京都大学大学院文学研究科修士(文学)。仏教学を専攻し、仏教思想の社会実装を研究する。

運営費の国では、本願寺派だけ